

【特集】子育てにおける男性の役割：  
「夫」から「亭主」への変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大江, 米次郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4753">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4753</a>

## 「夫」から「亭主」への変遷

大江米次郎

臨床心理学専攻教授・カウンセリングセンター相談員

最近では少子高齢化が顕著となり、子育て支援が国を挙げての喫緊の課題となっている。男女共に結婚年齢が遅くなり、ディンクス（DINKS：男女共働きで子ども無し）という言葉も耳に違和感がなくなった。生活の豊かさを求める気持ちが、経済的、物質的豊かさに偏りすぎた結果として、特に女性にとっては、社会的、制度的な不備のために（例えば、民法の規定において、離婚から300日以内の誕生は前夫の子とみなされること。前夫に「親子関係は無い」と裁判で証言してもらうことが原則必要であること等）結婚して子育てに苦勞することは回避したい気持ちを強化しているように思われる。企業等で男性の育児休暇を設けることが議論されているのも頷けるのである。

「夫」から「亭主」への変遷が本論の主テーマであるが、まず年齢の要因を採り上げてみたい。一般的に、夫は20～40代、亭主は50代以降がそのイメージに合うと思われる。まず次に示す暮らしの言葉について、どちらが身近であるか回答を試みて欲しい。

男女2人連れ：	カップル	アベック
赤ん坊を運ぶ：	ベビーカー	乳母車
ガラスのびん：	グラス	コップ
服の下に着るもの：	インナー	下着
ズボンの前：	ファスナー	チャック
チーン（生活音）：	電子レンジ	仏壇の鈴
コンピュータ：	マイクロソフト	IBM

左側に馴染みが多ければ「夫」の仲間と呼べよう。右側に馴染みが多ければ、もはや「亭主」に仲間入りといえるのである。これだけで判別するのは早計であるとの反論も承知している。そこで次の各項目を採り上げたいのである。

「行動」では	テキパキ	ぐうたら
「反応」では	手応えあり	糠に釘
「存在感」では	頼られる	見放される
「身体」では	壮健	半健康
「子育て」では	参加要請受ける	アドバイスする
「イメージ」では	一軍、前線	二軍、円熟

妻から見ると、行動、反応面そして身体面で軽快さと手応え、健康を感じさせ、存在感で歴然とした有意差をつける夫であるが、しかし子育てにおいては、アドバイスを与えてくれる亭主に一目置き、円熟を認めている点にも注目したいのである。

さて、女性から夫を表現する言葉としては、「おとうさん」「旦那」「良人」があろう。これに対して亭主を表現する言葉としては、「とうちゃん」「宿六」「うちの人」となる。逆に男性から結婚相手を表現するとき、夫の時代は「妻」「細君」であり、亭主の時代では「女房」「家内」が多いようである。夫が、配偶者

を妻や細君と呼ぶ間は、言うことに比較的従順であり、妹のように使いこなせる時代なのである。半面では、妻からは「働け!」「稼げ!」と鞭を入れられ生気を抜き取られる兆しが見えてくる時代ともなっている。もはや亭主になると、女房からは「粗大ごみ」扱いされ、まとわりついて離れない「濡れ落ち葉」という喻もある程に邪険に扱われ、さらに追い討ちをかけ、子どもを味方につけて「古い!」だの「くさい!」だのと批判される時代に突入する。即ち、家庭内離婚となり熟年離婚へと展開する今日の状況が出現するのである。因みに、厚生労働省の人口動態統計(2004年)によると、婚姻件数は約72万件、再婚率では夫が約18%、妻は約16%であり、10年前より共に約5%の増加であることがわかる。

次に最近の子育てにまつわる話題を考えてみたい。

### 1. 厳父と甘父、カミナリおやじの消滅

戦前は家長制度の下、男親は一家の大黒柱であった。子どもにとっては怖くて恐ろしい厳しさを体現する存在といえたのである。戦後のいわゆる団塊の世代は、まだ子ども時代にこの(普段はぐうたら亭主であるが、ここ一番の大事な時には)厳父を身近に感じて育ってきた時代であった。将来の幸せのために今を耐えることを学ばせることが子育て教育のスローガンであった。資源の無いわが国にあっては、人間を資源にするマンパワー政策がよく知られている。物質的に豊かになることが共通の目標となり、共通した価値観は「努力と勤勉」が大目標となったのである。しかし、高度経済成長によって一億総中流の意識が広がり、明日に備える今を辛抱する気持ちは、霧散し、今日を楽しく生きることが有意義である(アリよりもキリギリスに)との発想が台頭してきたのである。自分が経験したような苦しさをわが子にはさせたくないという気持ちが甘父を作り出す契機となった。叱れない父親が登場し今の主流ともいえるのが現状といえよう。

### 2. 教育ママと教育パパ、お受験

夫は外で仕事に追われ子育ては家にいる妻任せという状況が教育ママを醸成することになった。高学歴の母親は、自分の子育ての成功を進学校への入学に具現化することがアイデンティティーとなる。思うような学校に進学できなかった父親は、自分のような惨めさを子どもにさせたくない気持ちから、母親と共鳴し子どもを塾に通わせる教育パパに変貌するのである。経済的に苦しくても子どものためにと学費を工面する親の姿は痛々しい限りである。幼児期にあっては遊びが子どもの成長を大きく育んでくれるのであるが、有名大学付属幼稚園へのお受験が隆盛を極め、依然として学歴神話は根強いといえる。不況時に教育産業が逆に繁栄する時代なのである。先述した一億総中流はもはや崩れ、財力や資産が無ければ子どもに高等教育を望めないそのような時代ともいえるのである。持たざる者と持てる者の二極化が先鋭化することの証左として「お受験」が出現しているのである。

### 3. ドメスティック・バイオレンス(DV)

男親(夫)が母親(妻)に家の中で子どもの目の前で平気で暴力を振るう行動がDVである。父親の機嫌で家庭の状況が一変するために、子どもはいつも親の顔色を気にしながら過ごすことになる。何か言い合いが始まると、子どもは押し入れやベッドの下に身を隠し、嵐が過ぎ去って欲しいと息を潜めて耐えているのである。親子関係が不安定で子どもの感情表出の仕方が曖昧になり時には失感情症といえるものが出現する。また当然に情緒不安定に陥りやすく、状況を打開するための暴力を取り込んで、子どもは、満たされない欲求から、弱い母親に向けて暴言、暴力を振るうことも多々発生する。力の関係に敏感であり、

子どもが集団に入っても弱い他児に攻撃的な言動を向けやすいのである。他者を思いやり信頼できるように特別な支援が必要になる事態も認められる。

#### 4. 昼は保育所、夜はナイトベビー、育児放棄

子どもを生んだけれども育児ができない母親が顕著に増加しているのが現状である。母子家庭（勿論、父子家庭にも発生するが、離婚で子どもを引き取るのは母親側）では、経済力の弱い親の欲求不満や焦燥感が反抗できない子どもに直接に向けられることになる。暴力的な虐待までには至らないが乳児期から面倒を見ない育児放棄である。朝に保育所へ預け、夕方に子どもを迎えに来るが、家には帰らず、そのまま向かう先は夜の託児所である。要するに子どもは荷物のようにたらいまわしされることになる。朝には再び保育所へ連れて行くことになる。まさに親の愛情を受けたくても受けられない子どもである。社会制度的な救済が必要となる子どもたちである。愛情遮断に起因する低身長児が保育所で見かけることも案外と多い。親子を経済的にも支える体制を整える社会的なセーフティ・ネットが早急に求められるのである。

#### 5. 子どもを着せ替え人形や不潔恐怖にさせる親

これは先述したお受験にも関係する内容であり親の過保護、虚栄心がなせる業ともいえるものである。ブランド物を惜しげもなく買い与え、子どもの姿を周囲から褒めてもらい賞賛してもらうことが快感であり、子どもは親の手段となりおもちゃ扱いといってもよい。高価であるために汚れ破損などには親がことのほか気にすることになる。例えば、砂場で遊ぶときには砂場用の服に着替えさせることを保育士に求めるのである。絵の具での遊び、ドロ遊びなどはさせるなど注文も細かくなっていく始末である。排尿で失敗し汚れたままで家に戻ると親のチェックに怯える子どもが現実にいるのである。失敗を繰り返しながら成長することの実感が得られず、自発的な行動は抑圧され、終には幼くして不潔を極度に恐れる不潔恐怖が作られてしまう悲劇が起こる。

いずれもこれらの項目は、親の身勝手が子どもの育ちに多大な影響を及ぼしている事例を見出せるのである。

次に父親の子育て分担を、国際家族年のデータ比較で示しておこう。（6各国、1000人対象）

##### ・食事の世話

米国 34,4 スウェーデン 31,4 英国 25,0 タイ 21,0 韓国 16,9 日本 9,4

##### ・しつけをする

スウェーデン 75,9 米国 67,8 英国 64,5 日本 51,6 タイ 45,5 韓国 43,3

##### ・勉強を教える

米国 36,7 英国 36,2 タイ 29,7 日本 29,3 スウェーデン 26,7 韓国 25,6

##### ・遊び相手をする

英国 73,1 米国 70,1 日本 67,6 スウェーデン 65,1 タイ 56,2 韓国 40,7

##### ・生活費の負担

韓国 93,5 日本 88,7 スウェーデン 85,0 英国 79,3 米国 78,2 タイ 51,7

（但し、これら各項目の数字は、父親の役割および主に父親がするとの両方の比率である。）

「食事の世話」については、西欧各国が高く、日本は特に食事の世話について6各国の中で最下位である。子どもと直接に関わるよりも主に生活費を負担することが日本の父親の役割になっている。つまり子

育てにおいて父親の姿が判りにくくなっているのである。

日本では、男は仕事、女は家事・育児という発想が依然として根強く存在するといえよう。女性は子どもが生まれると育児に精力を向けるため、夫からの理解と支援が必要とされる状況が出現する。相互に相手の立場を思いやる努力によって円満家庭が保障されることになる。

さて次に、夫婦関係、親子関係の微妙な心理、生活感を川柳によって示そう。

「夫の時代」

幼稚園 弁当ある日 俺もある

子どもを中軸にした日々の生活に、今や夫はおまけの扱いとされる姿である。

長電話 したあと妻は 静かです

日々のストレスを友人とのおしゃべりで発散すると夫への風当たりが弱まるのである。

マスクして 妻の悪口 言ってみる

面と言い返せない、むしろ言い返さないほうが円満に収まるとの達観がある。

「亭主の時代」

「連れてって」 今じゃ一人で 「行ってきて！」

いつも一緒に楽しかった時代は、もはや過去の幻（まぼろし）となってしまった。

女房は 昔モナリザ 今ムンク

微笑をいつも向けてくれた懐かしい日々、今は亭主非難の叫び声が響くばかりである。

総選挙 家では妻が 総占拠

今年は総選挙の年であろうか、そんなの関係ねー、亭主の居場所が無いのである。

子育ては互いに夫婦が無関心では上手くいかないことは自明のことである。夫への愛情表現、妻への愛情表現について、「焼きもちとせんべいは焼き方一つで味がでる」と昔から言われていることを思い出してみるのも離婚の防止に寄与するのではないだろうか。

そこでもう一つ。

子育ては 知力体力 プチ手抜き

子どもを生んでも自動的に母にはなれない。子どもの発達する姿についての知識と考え方が問われるのである。育児はやはり体力勝負となってくる。しかし、いつも緊張の糸が張りつめたままでは失敗しやすい。上手く手抜きを覚えるのが子育てのコツである。互いに相手の立場を理解し、思いやりの気持ちを大切に作る夫婦には何が共通しているのか。思い出されるのが、ショウペンハウエルの寓話を基に、精神分析医ベラックが使った言葉“ヤマアラシ・ジレンマ”（Bellak, 1970/1974）である。極寒から身を守る際に、身を接近させすぎると己の刺によって相手を傷つけることになってしまう。だが離れすぎると寒さで凍死する。要するに適度な距離が最も安全なのである。ここでは「者間距離」という表現を試みたい。今は（利便性が逆に人間を退化させかねない）モータリゼーション時代であることを揶揄する意味を込めての語呂合わせである。夫婦間が適度な者間距離を保てることで、

子育てで 夫婦絆が 強められ

といった表現に凝縮できよう。子どもがまさに夫婦の鎧となり、健全で喜びに通じる子育てが可能となるのである。

子どもは親の姿を実によく観察している。父親、母親の一挙手一投足を見抜いてくる。親が子育てに無知であったり自信が無い場合には、子どもは愛情を求めて逸脱行動に至ることがある。非行の心理はこの面から探ると意外と解決策が潜んでいるとよい。

子育て支援、教育支援が叫ばれる時代にあつて、見直してみたい教訓を次に示す。

まず親は幼少期から本音で子どもと向き合える関係を築くことが重要である。具体的には、子どもを思う優しさと強い愛情の絆そして包容力を持って、現実を直視し、立ち向かう厳しさと強さを学ばせることである。これらの調和した愛情を注がれ、慈しみ育てられた子どもには大らかで温かみのある心が呼応して生まれるのである。例として挙げておこう。江戸時代、会津藩の男児が藩校「日新館（現在は博物館となっている）」入学前に唱えさせられた心得である。「什（じゅう）の掟」といわれている。入学前の6～9歳の子どもは、自分たちで集団を作り「お話の什」とか「遊びの什」として唱えた。

- ・年長者の言うことに背いてはなりませぬ
- ・年長者にはお辞儀をせねばなりませぬ
- ・うそをついてはなりませぬ
- ・卑怯なふるまいをしてはなりませぬ
- ・弱い者をいじめてはなりませぬ
- ・戸外でものを食べてはなりませぬ
- ・ならぬことはならぬものです

「ならぬことはならぬものです」の結びの一文で構成されている。これらの約束には絶対に背かないようお互いに戒め努力したのである。最近ではマナーの崩れが目に見えるものがあり、この掟は今の時代には一服の清涼剤といえよう。いじめ問題で苦慮する各地の教育関係者の注目を集めているとのことである。

「三つ子の魂百まで」とよく言われるが、著者が子どもの頃、父親から教えられた「五省（ごせい）」を今もよく記憶している。

- ・至誠に悖るなかりしか （まごころを尽くしたか）
- ・言行に恥ずるなかりしか （言行は一致していたか）
- ・気力に欠けるなかりしか （覇気はあったか）
- ・努力に憾みなかりしか （研鑽を積んだか）
- ・不精に亘るなかりしか （手抜きしなかったか）

これらは江田島にある旧海軍兵学校でその日の行いを自分に問いかける5つの反省であった。この稿を書いている当にその時、海上自衛隊の護衛艦が漁船と衝突する事故が発生した。今も五省は海上自衛隊の日々の行動を自省する標語として使っていながら真に遺憾なことである。

古今の聖賢による金言として、「孟子」の中に、「至誠（まごころ）を尽くして天下に感動させることの出来ないものはなく、うそ偽りで人をよく感動させることの出来るものは決してない。」と示されている。「至誠の人」を理想的人格として（決して懐古主義ではないが）尊びたいと考えるのである。

さて、妻から「夫」として尊敬され、「亭主」として卑下されないための方策を述べてみたい。

そのコツは「間」抜けにならないように次の3つに気配りすることである。

(1)「時間」が抜ける（自分だけの時間を取れない）と、男の痛手は大きい。自由に過ごせる時間を確保せねばならない。仕事からも、妻や子どもからも解放された誰からも束縛されない時間があれば、思索するための読書が満喫できよう。あるいは趣味に没頭できよう。

当然ながら、同じことが妻の側にも確保されねばならない。

(2)「空間」が抜ける(自分だけで過ごせる部屋が取れない)と、やはり苦しい。周囲の騒音や雑音そして周囲の視線から逃れられると気兼ねなく声を出せる。ボリューム一杯に音楽を楽しめよう。どんな姿であろうが気兼ねせずとも良い。開放感を実感できよう。気に入った絵画を壁に掲げられよう。その空間で自在に動き回る喜びが必要なのである。当然ながら、同じことが妻の側にも確保されねばならない。

(3)「仲間」が抜ける(家、近所から孤立する)と、実に寂しい。定年後に自分の仲間がいないことは辛いことである。共通した趣味をできれば早い時期から見つけておくことである。雑談や趣味を語り合える楽しみは、時間を忘れさせてくれるものである。近所の仲間は頼りになるといい。突発的な事件が生じると助けが得られやすい。当然ながら、同じことが妻の側にも確保されねばならない。近所付き合いでは、むしろ妻の得意となっていることがなんと歯がゆく思うことが多いのであるが……。

これら3つを意識することが、妻や女房とは適度な「者間距離」を保つことができ、「夫」や「亭主」の心身の健康のためにも欠かせないのである。

ここで、「心の安定三角形」をイメージ化してみよう。

3層構造から成り、底辺の最も面積の大きい部分が「信頼」である。自分自身への信頼、家族への信頼、社会への信頼を含むと考えたい。その上の中間層は「喜び」である。家族、他者との交流ができることへの喜びとってよい。信頼に裏打ちされた喜びといえる。そして最上層の小さい面積部分が「苦痛」である。即ち、信頼と喜びを基盤に持つことで辛い苦痛に耐えることが可能となるのである。この三角形を上下逆転させると、最上層の苦痛部分の面積が最大となり、中間層の喜びは変化しないが、底辺で支える信頼部分の面積が最小であるために、直にこの三角形は倒れる。つまり逆三角形では自立ができず、心が不安定になってしまうのである。

次にまとめとして、円滑な「夫」から「亭主」への変遷を提言しておきたい。

#### (1) 配偶者から尊敬されること

結婚は互いに好きだからという単純な感情だけの理由では失敗することが多い。価値観の違い、生活習慣の違い等が、一緒に暮らす中で徐々に顕在化し、配偶者の顔を見ること、声を耳にすることが煩わしく嫌悪感を持つようになってくる。これは破局への前触れとなる。「なぜそんな自分勝手なことをいうのか!」、 「なぜ私の言うことが聞けないの!」といった喧嘩が頻発するのである。しかし、配偶者を尊敬する気持ちがあればこのような対立は生じにくい。仕事面で頑張る姿に、一途に打ち込む姿に、子育てに参加する姿に尊敬の念を抱いてもらえるよう至誠の人たるべし、と言いたいのである。

#### (2) 夢よりも目標を持つこと(等身大を意識)

夢を持つこと自体は決して間違ったことではない。ただその夢が現実離れしたものを追い求める「青い鳥症候群」であってはいけない。言い換えれば、幼児的な肥大した自我を持ち続けたままの未熟さが配偶者との摩擦を生むことになる。現実吟味の力が無いことは、歪んだ自我防衛に陥り易いのである。「今度こそは頑張るから!」の言い訳ばかりで終には愛想を尽かされる羽目になる。等身大の身近で達成可能な目標を持つことである。目標を達成できた充実感自分自身への信頼を強め、この姿は結果として配偶者からの信頼さらには尊敬を得ることに通じるのである。

#### (3) 男は自分で料理ができること

少し昔のコマーシャルに「私、作る人、僕、食べる人」というのがあったと思う。食事時間近くになると食卓付近に出没し、周辺をウロウロすることは妻にとっては邪魔な存在と気づかねばならない。「きょうは何(どんな料理)?」と言うものならば、途端に妻の機嫌を損ねることになる。「作る身になってごらん!」妻は気遣いの無さに苛立つのである。味付けに言及すれば、あと数日は食べさせてもらえない。「そ

んな言い方するのなら、自分で作れば！」と言い放されて万事休すである。そこで、定年前から料理を秘かに習っておくことを勧めたい。時には、「日頃のお礼に感謝を込めて、僕が作ります。」と呼びかけ労を償うことである。

#### (4) 完璧を求めないこと（あせらず、あわてず）

何事にも完璧を目指すことは言葉としては確かに響きが良い。自分にも厳しく完璧でありたい。少しの妥協にも許せない。しかし、結婚で自分にまして配偶者に完璧を求めることは身の破滅を招く結果になるといわざるを得ない。互いにこころのゆとりを持てることが円満に過ごせるコツなのである。配偶者の言動がその都度気にかかることは、相手を信用できていないことの裏返しである。度量が小さいともいえる。「亭主」の言葉には、配偶者から見て、危なっかしい頼りない男を庇護してあげたいという親愛の気持ちも込められているのである。決して突き放しの意味だけではない。単身生活時代からの感じ方、考え方が根強く残っており、配偶者のそれとは違いがあると再認識すべきである。同じ屋根の下で互いに対話を重ねることで共通理解が得られるのである。まさに、焦らず、慌てず、これを心がける気持ちが円満な「夫」から「亭主」への変遷なのである。

#### (5) 謙虚さを忘れないこと

夫時代はまだ「妻」への感謝の気持ちが強い。齢を重ね亭主時代になると、「俺の経済力で食べさせてやっている！文句を言うな！」といった驕り高ぶりが、残念ながら、少なからず顕在化してくる。しかし、よく考えてみるがいい。働ける力を本当に陰で支えてくれている存在は誰か。言うまでもない「家内」なのである。メタボリック症候群など身体面の不健康が死に直結しかねない状態に歯止めをかけるべく大いに気遣いをしてくれる配偶者に感謝せねばならない。即ち、「生かされている」という謙虚さを忘れてはならない。最近では他者への気配りが薄れている時代になってしまった。家庭で、謙虚な気持ちを持って接する親の生き方を見て学ぶ子どもが育って欲しい。繰り返しにはなるが、「夫から亭主への円満な変遷」には、子育てへの手がかりも含まれていることを強調したいのである。

## 文献

Bellak L (1970) : *The Porcupine Dilemma, Reflections on the Human Condition*. New York : Citadell

Press.小此木啓吾 (訳) (1974) : 山アラシのジレンマ, 人間的疎外をどう生きるかダイヤモンド社

第一生命広報部(2004) : サラリーマン川柳 <http://event.dai-ichi-life.co.jp/>

林 道義 (1996) : 父性の復権 中公新書

小此木啓吾 (1992) : 家庭のない家族の時代 ちくま文庫